

隣人との緊張感のあるゆるい付き合いを想う

杓 谷 茂 樹

盛田清秀先生と私は、開学以来、研究室を並べてきた隣人である。いつも隣のドアを見やっては、今日は先生早いとか、まだがんばっているのかとか、あるいは今日は出張かななどと思いながら自室の鍵をまわしたものだ。先生との付き合いでは、それぞれ国際観光・地域創生コース長と学科教務担当という立場でのやりとりが多かったように思う。基本的には教務担当である私の方から、いろいろとお願いをしたり、相談したりというパターンが多かったが、隣のドアをノックする際には、少し緊張して、話す内容をあらかじめ頭の中で整理してからドアをたたいたものだ。でも部屋を出るときにはいつも不思議と笑顔になっていたような覚えもある。

盛田先生と言えば、会議やその他の学科運営のさまざまな場面で、若手教員のやることにはあまり口出しをせず、自らの主張は専ら上に向けて発言するところがあったのが印象的である。その際、相手が誰であろうと言うべきことははっきり言う上に、かなりの頑固おやじでもあった。すごいのは発言がいつも理路整然としていて、なかなか相手に反論を許さないところだろう。いろんなことがきちんと計算された上でシンプルに整理されておこなわれるから、潔いほど無駄なことはしない。私のような目先のことに振り回されがちの、ふらふらした人間にとっては、そんな姿勢には憧れすら感じてしまう。

この外連味のなさは時に近づき難さすら感じさせるかもしれないが、それでいてちゃんと優しさを伴っていることは付き合ってみればよくわかる。先生が「戦闘態勢」にないときに見せる人なつこさは、とても温かく、人を安心させるものだ。私が教務関係の仕事でかなり大変な状況に置かれているときなどに、部屋にフラッとやって来て、いろいろご苦労さま、大変だねと声をかけてくれることが何度かあったが、正直あれには本当に救われた。懐が深いということはこういうことなのかと思う。

そんな盛田先生は、学生たちにはどういう風に映っていたのだろうか。先生の授業は人気もあり、ゼミ生の数も多めだ。地域実習などでも学生たちは熱心に取り組んでいた印象が強い。外から見て、先生と学生たちとの関係性も、やはり一定の緊張感を保ちつつ、温かく居心地のいい、そんなものなのだろうと見て取れた。

さて、これからの国際文化交流学部。正直行って盛田先生がいないことがどういう形になって具体的に表れるかはわからない。ただ言えることは、これまで盛田清秀という人物の存在感が学部にとっていかに大きなもので、我々に安心感を与えてくれていたかを思い知らされることにな

るだろうということだ。先頭を切って学部を引っ張ってきたというよりは、私たちがやることをゆるく見守り、それでいて緊張感を持ちながらしっかり支えてくれていたのが盛田先生だった。私もそろそろ定年までの秒読みが始まるころに来たが、残された日々、なかなか盛田先生のようにとはいかないまでも、先生の背中から学んだいろいろなことを引き継いで学部を支えていければと思う。そして、その思いを胸に、ここにこの憧れの隣人を見送りたい。

盛田清秀先生、4年間お疲れさまでした。どうもありがとうございました。